

柳田國男

魂の行くえ



# 魂の行くえ



## 一

盆のお精霊を、山の嶺へ迎えに行くという風習が、大野郡下荒井の部落にあるという簡単な記事は、私たちにとってはかなり貴重なものである。越前では今もまだ先祖の魂が、山の高い処に留まって居て、盆にはそこから子孫の家を訪れて来るといふ信仰が、そちこちの山村に保存せられて居るのではあるまいか。何とかして誘導尋問の形でなしに、諸家の故老の言うところを聴き集め、

それを総合して見たいものと思う。

昭和二十年の秋、自分が世に送った「先祖の話」という本には、古来日本人の死後観は此の如く、千数百年の仏教の薫染にも拘らず、死ねば魂は山に登って行くという感じ方が、今なお意識の底に潜まって居るらしいと説いておいた。是にはそう思わずには居られない数々の根拠があり、決していい加減な空想ではなかったのだが、何分にもその一つ一つの証拠力が弱く、日頃耳に馴れて居る天上地底の後生説を、打消してしまうには足りなかった。是からさき我々がどちらを信じてよいかの問題と

は関係なく、かつてこの国の住民の多数が、どう思い込んで居たかは事実なのだから、二つとも本当だということとは無い筈である。それを決定しようとするれば、この越前の風習は粗末にならぬ資料である。

現在の盆の魂迎たまむかえは、通例は廟所、即ち石塔の在る処へ行くことになって居る。墓つかも動け我が泣く声は秋の風などという句さえあって、故人の霊もまた土の中に休んで居るように、推測する者が段々と多くなつたように思われる。しかし誰でも知って居ることは、石碑を一人一人の死者のために、建てるようになったのは新しいこと

である。古いといつても元禄以前の石は甚だ少なく、日清戦後の頃から、急に個人のもものが多くなつたが、それでもまだ共同の墓地に送られ、追々に其場処の知りにくくなるものが相応にあり、しかも盆の魂祭りをせぬ家は、村方には少ないのである。どこへ精霊さまを迎えに行きますかという問いは、民俗学の仲間には屢々必要であつた。

谷川の流れの岸へ、又は橋の袂たもとへ、又は路の辻へ出て迎えるという答えが折々はあり、九州と奥州のごく端々の方では、盆の市に出て積霊を迎え申すというもの

もある。それよりももっと数多く方々で聞くことは、盆花採りと称して野山に出て、桔梗ききようや女郎花おみなえしその他の定まった野花を折り帰り、それを魂棚に飾ること、是は歳棚の為のお松迎えと同じことで、この植物に付いて神霊が家に迎え入れられるのだと、私たちは前々から解して居るのだが、一般には是を仏法の供花も同じに、ただ欠くべからざるこの日の祭具というようにしか見て居らぬ人が多い。詳しく之に伴なう作法や約束を比べて見たら、そうでないことはやがて判るのだけれども、それには又大分の弁証を費さなければならぬ。

それよりもやや顕著なのは、盆草刈り又は盆路作りと  
いって、この精霊迎えに先だち、普通は七月七日の日に、  
草を刈り路をきれいに掃き浄める習わしで、山に接した  
村里ならば、今でも是をしないという方が珍しいかもし  
れぬ。この時には墓薙はかなぎなどといつて石塔場のまわり、  
又は村内の通路をもきれいにするが、特に注意すべきは  
一年にこの日だけ、山の頂上から麓の里まで、常はかま  
いつけない一筋の路を刈り払うて、それを精霊様のござ  
る路と、謂つて居る人が今でも多い。墓地へ精霊を迎え  
に行く村々でも、まだこの盆路作りを続けて居るものが

幾らも有る。墓は祭場であり、精霊を是へ迎えて来るのであつて、家の盆棚は新たに設けられた第二の祭場だつたろうということが考えられるのだが、それを立証するまでの資料が、今はまだ出揃わずに居るのである。

## 二

近いうちに世に出る信州上伊那郡の黒河内民俗誌には、越前と同じ例が一つある。ここはいわゆる南アルプス連峰の、ずっと北へ伸びたやや低い山々で、其麓に

接した西側の村里では、もとは一般に山へ盆様を迎えに登ったらしく、その習俗は近い頃まで残り、其場処は僅かの草生地で、そこを六道原と呼んで居る。六道は仏教の言葉、人が現世の果報に引かれて、死ねば六つの道のどれかに分れて行くことを意味して居た。そこ迄行つてもなお我々の祖霊は、迎えられて盆には戻つて来るものと思つたのである。この六道原が名のみ存して、今日はもう遙々と登つて行こうとはせず、魂迎えには村々の寺の庭に集まり、そこへ山から採つて来て置いてある棺の小枝を、めいめいに家に持つて還るのを、魂迎えとして

居る部落が段々多くなつたらしいが、この日六道原へ行く者が、近頃まで少しはあつたというのは、習俗変遷の過程を示す例として意味がある。前に掲げた七月十一日の盆花採りなども、此頃ではそう遠くまで登って行かぬ者が多いようだが、それでもまだ方角や場処は大よそきまつて居て、どこから持って来てもよいというのではなさそうに思う。

それについて考え合される一事は、是はお盆の迎えとは別だが、婦人が産室に入った際に、馬を牽ひいて、又は負おいはわ繩を肩にかけて、山へ山の神を御迎えに行く習わしが、

東日本の諸処に於て注意せられて居る。事によると越前の山村にも、まだあろうも知れぬが、馬で行く場合には其馬が立ち止まり、いななき又は立髪を振り、その他何等かの異常な挙動をしたら、それを合図にしてそこから引返して来るとというのが普通であつた。神の御姿はもとより眼に見えないから、昔の人たちはこういう些細なる徴候を以て、神の實在を信ずるような、訓練を受けて居たと見るの他は無いのである。そうすると馬を持たぬよくな貧しい農夫が、ただ負繩やシヨイコを肩にして、御迎えをする場合にはどうしたかという、是にも自身に

異常なる感覚が起ると、神が途中までもう出られて居ることを確信してさっさと引返し、そうでなければ特定の場処まで到着して、願いの言葉を以て素朴に背なかを向けたことと思うが、その所作まではまだ談ってくれた人が無い。島根県の西部などでは、藁を布切れで編んだ背負台をセナカウジと呼んで居るが、山でセナカウジの繩をほどいて手に持ち、山の神を載せ申す唱えごとが、ただ記憶せられて居る。しかしそんな事をして、もしも返し申す時の言葉を忘れて居たら、大変なことになるからと謂って、今では戒めてみだりに之を口にする者が無い

ということである。

唱えごとは斯うして追々に忘れて行くものかと思われ  
る。盆のホトケ迎えなどでも、信州では墓所へ新しい荷  
縄を、肩にかけて行く者がもとは多かつた。現在は成人  
はもう言わなくなつたが、今でも少年だけは、墓石の前  
に来て背なかへ両手をまわし、じい様ばあ様さあ行きま  
しよと言ひ、又そう言わせようとする土地が方々にある  
様子である。山の頂上のいわゆる六道原に行つても、か  
つては成人がそう言うことをして居たのでは無かつたろ  
うか。又、越前の下荒井などではどうだつたか、知りた

いものと私は思う。

それからなお一つ、山に家々から登って行く代りに、寺の庭に集まって、そこから植物の枝を迎えて来るといふ例は、非常に有名なものが一つ京都にあつて、今でもまだ盛んに行われて居る。是だけは色々の書物に出て居るから詳しく説く必要がない。日は盆の月の十三日、木の枝は最近は槇まきの葉となつて居るが、やはり其行事を六道参りと呼ぶのであつた。墓所へ行かずともここで槇の小枝を求めて来れば、それが精霊様迎えになつて居るのである。誰かもう気がついた人が有るかも知らぬが、こ

の六波羅の寺には本名がちゃんど有るに拘らず、昔からあたご愛宕寺の名を以て知られ、その理由が十分に説明せられて居ない。一方には京都の西北に屹立して、町のどこからでもよく見える愛宕山は、今でも信心の者が登拝して、必ず櫛の枝を折って還る山であつた。ここへ家々の祖霊を迎えに行く風習が曾てはあり、今では其信仰が改まつて、一部分だけ町中へ移つたのではないかどうか。愛宕山の櫛が原も、本来は一箇の六道原ではなかつたか。今日は勿論いつ参つても櫛を売って居るが、ここでも稻荷山の駿の杉のように、衆庶の競うて登る日が定まつて居

たのではないか。それが初秋の盆の日でなくとも、私がかまわぬと思う。というわけは、七月魂迎えの特に盛んになったのは、中世以後のことだからである。

## 三

次には山の頂きに登って火を焼くということ、是も越前の今立郡の村々に、幾つもの顕著なる事例があるというのは、私にとっては新しい暗示であり、これによって始めて山から盆の祖神が降って来ることが、推定し得ら

れるような気がする。御承知かと思うが、山に登って篝かがりを焚くという例ならば、「歳時習俗語彙」にも沢山に列挙せられ、稀なることでは決してない。信州は殊にそれが盛んで、諏訪を中心とした広い農村では、今はスポーツに近く、子供の大きな楽しみの一つにもなつて居る。近江の湖東にも三河の海岸にもあるのみか、京の大文字などはそれが名物となつて、外国にまでも遠く知られて居る。火を焚く為には必ず山に登るであろうが、それだけではまだそこへ精霊を迎えに行くものと、きめてしまふことは出来ないのである。いわゆる高燈籠の火は、以

前江戸の町に盛んに行われ、それから諸国に拡まって今でも止めてしまうことの出来ぬ土地が多い。山で火を焚くという印象的な行事が前になかったら、こういう発明も起らなかったかも知れぬが、それだけに又これは単なる道しるべで、夜空を遠く訪い寄るものに、ここが故郷の家のあたりなることを、知らせる方便の如くにも解せられて、むしろ却って山からも歩み降るといふような、以前の想像を覆えす効果があつた。私なども白状をする、もとは之によつて、最初から祖霊は空を行くと信じられたかの如く、一度は想像して居たのである。

實際、或はそういう風に解する人が多いかもしれない。ここで考えて見てよいことは、今日の人の居住地が、段々と山から離れて来たことである。水も薪も後の山からという村は、引続いて今も有るけれども、それは知らぬ間に少数分子となり、この国土を代表することが出来なくなつて居る。都市と工場地の大部分、即ち人口の最も多い区域は、すべて近世の初頭に海から拾い上げた陸地で、そこにはもう入会山も断念しなければならぬように、死んで行くべき嶺々も遙かで、屢々霧霞に隔てられて居る。人が空中から祖霊の訪い寄ることを信じ得なかつたなら

ば、忽ち我々の永遠は解しがたくなるのであった。いわゆる高燈籠文化はこの点に於て意義がある。馬でも荷繩でも迎えに行けないような処に、我々の魂は行って休んで居なければならぬまでに、幸か不幸か島の天然は拡大したのである。日本人の来世観が、恥かしいほども紛乱して居る原因は、主として茲に在ると見てよいようである。

以前はどうであつたらうかという研究は、この方面に於て特に実用がある。あつた事実を知りもせず考えもせず、勝手な理窟をつけようとするのは鳴漣おこだからであ

る。最初先祖の魂を迎えに、登って行く処が山だったときまれば、山で火を焚くのは烽火燈台のためで無く、祭の行事の一部だったことが判って来る。今でも盆には墓の前と門の口に、迎えと送りと再度の火を焚くことは、全国普通の習わしであるのみか、古来の祭は主として夕暁の間に行われ、篝火から電燈まで、大よそ火を燃さない祭というものはかつて無いのである。

今立郡各村の山上の火祭は、他の府県の類例にもまして、特に魂迎えとの因縁が濃やかであった。その一つは正月の左義長さぎちようとも同じに、篝火の片端に小屋を作って、

祭の夜籠りをした形跡のなお遺つて居たことである。その二はこの火の燃え上るときに、お精霊を迎え又は送るといふ言葉を、高く唱えたことで、それをヤイヤイボとかコンブク様とか呼んだのは、永い歲月の言葉の転訛であるらしいが、日本海に面した多くの平野の村では、墓や家のまわりで火を焚く時にも之を唱え、大抵はジイ様バア様、又はジイナバアナと呼びかけて居ることは、既に「先祖の話」にも述べた通りである。家に達者な祖母の居るときでも、そう言つたらしいのを見ると、是は代々のふる人を意味する、最も素朴なる小児語だったと

解せられる。

#### 四

それからなお同じ折に注意して居るが、秋田県北部の一地域では、村の少年等が岡の上に登って、越前今立郡の村々とよく似た火祭を行うのは、春の彼岸の中日の行事であつた。そうしてやはり此火の燃えるときに、ジイ様バア様お出やれを高唱して居た。同じ国中一般の習俗ではあるが、期日は土地ごとに少しずつの変化があるの

は、私には意味が探いと思われる。それをやや詳しく言うならば、久しい間にめいめいの解釈、又は他の外部の状況との折合いが、いつと無く行われたので、単なる模倣や感染でなく、むしろ日本人なるが故に、夙くから持つて居たものの、土地ごとに成長した痕かと思われ、従ってその多数の例の総合によつて、民族の自然の歩みが判つて来て、将来のよい参考になると思う。

たとえば魂迎えから魂送りへの期間は、大体に短縮の傾向を示して居る。現在は迎えるのが十三日の夕刻を通例とし、送るのは十六日、それも午後であり、又は早朝

であり、東京などではまだ十五日の深夜に、送ってしま  
うという家も多い。最初から斯うときまつて居たのでは  
ないとするれば、迎え火を山で焚く日が、七日であり五日  
であつても怪しむに足らず、或はそれよりもずっと早い  
日に迎えて来て、主要なる生活行事を、その祖霊の眼の  
前に於て、実行したという時代も無かつたとまでは言え  
ない。稲の栽培の開始から終局まで祭の謹慎を持続する  
などは、今の人からは想像もできぬことだが、田の神は  
春の始めに山から降り、秋の終りに山に還つて、山の神  
となるという言い伝えだけは、全国に分布して居る。或

はこの間にも物忌ものいみの波があり、祭を幾つもの儀式の重さ  
軽さに、分けて考えることが許されたのかもしれない。

是も立証の大きな責任を、今後を負わなければならぬ  
問題だが、私などは実は家々の田の神を、やはり祖霊で  
あつたろうと思つて居るのである。春の彼岸にジイ様、  
バア様が、火に迎えられて里に降つて来るといふことは、  
乃ち其目的が田業を援護するにあつたのではなからう  
か。今度キテイ台風の惨害を受けた、赤城山東麓の農村  
などでは、旧四月八日に定まつて山に登つて行くが、そ  
れは過去一年の間に死者のあつた家に限られるという。

しかし他の地方に広く行われる卯月八日は、めでたい家でもやはり山に登り、火祭こそは無いが、山から色々の木の花を折って来て、天道花と称して高く竿の先きに結わえて立てる。比叡山の花摘みも同じ日で、この日ばかりは女人禁制の山が開放せられた。之を仏法で解釈する説の、しどろもどろなのを見てもわかるように、ここにも曾ては山に花を迎える日が古くあって、それが農業開始の卯月の祭だったことも考えられる。仮にそうだったとすれば伝教大師の、我が立つそま杣まよりも古いことになるのである。

盆を魂祭の日とし始めた原因も、仏法の介助以外に今一つ、暦の改定がトシの始めを、くり上げたことがそれだったらしい。春の種播き苗取りと、秋の刈入れ稲積みとの中間に、水無月という旧六月が、耕作者にとって気遣いな月であつて、ここで色々のねんごろな祭の営まれたのは、恐らくは祇園以前からの事だつた。今では一般に六月の朔日ついたちから、十五日までに祭をすませるようだが、不安はなお多くその後にも残される。八朔はっさくは今いう二百十日に該当し、それを過ぎるとやつと心が休まるということとは、大昔とてもほぼ同じかつたであろう。そうする

と六月晦日みそかのいわゆる夏越なごし以後、この日に入るまでの中間に、一つの戒慎の日を置くことは必要で、それが偶然に朝廷の盂蘭盆会うらぼんえ、寺々のいわゆる自恣の日と、合体することになったのではないかどうか。とにかく記録文献の上では、法師の干与した行事だけが早く現われ、家々の魂祭が遙かに遅いばかりに、この風習までが外来のもののように、久しく断定せられて居たのだが、これほど大きな仏法の影響の下でも、なお日本固有の考え方は伝わって居る。百年二百年の遠い先祖が、毎年この日になると比の家に戻り、生きた子孫の者と交歓するというこ

とが、果してあの宗旨で説明し得られようか。山へ戻つて次の年の初秋に、迎えに来るのを待つて居るといふものが、実際にいによう仏法のホトケなのであるうか。

日本をいによう囿繞したさまさまの民族でも、死ねば途方もなく遠い遠い処へ、旅立ってしまったうという思想が、精粗幾通りもの形を以て、大よそは行きわたつて居る。独りこいうの中に於てこの島々にのみ、死んでも死んでも同じ国土を離れず、しかも故郷の山の高みから、永く子孫の生業を見守り、その繁栄と勤勉とを顧念して居るものと考え出したことは、いつの世の文化の所産であるかは知

らず、限りも無くなつかしいことである。それが誤つた思想であるかどうか、信じてよいかどうかは是からの人<sup>あまた</sup>がきめてよい。我々の証明したいのは過去の事実、許<sup>あまた</sup>多の歳月にわたって我々の祖先がしかく信じ、更に又次々に来る者に同じ信仰を持たせようとして居たということである。自分も其教のままに、そう思つて居られるかどうかは心もとないが、少なくとも死ねば忽ちコスモポリットになつて、住みよい土地なら一人きりで、何処へでも行つてしまおうとするような信仰を奇異に感じ、夫婦を二世の契り<sup>はす</sup>といい、同じ蓮<sup>うてな</sup>の台に乗るといふ類の、

中途半端な折衷説の、生れずに居られなかったのは面白いと思う。魂になってもなお生涯の地に留まるという想像は、自分も日本人である故か、私には至極楽しく感じられる。出来るものならば、いつまでも此国に居たい。そうして一つ文化のもう少し美しく開展し、一つの学問のもう少し世の中に寄与するようになることを、どこかささやかな丘の上からでも、見守って居たいものだと思う。

昭和二十四年の九月五日、この月曜日は、松岡約斎翁が亡くなられて、ちょうど五十三回日の忌辰きしんである。翁

は仏教は信じられなかったが、盆の魂祭は熱心に続けて居られた。

(昭和二十四年十二月)





日本文学電子図書館

---

魂の行くえ

著 者：柳田國男

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 20

「柳田國男集」筑摩書房

昭和44年3月15日 初版第1刷発行

日本文学電子図書館